

禅の友

Zen no Tomo

5

May 2024





ご本山だより 大本山永平寺【木の芽峠拝登】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



五月の終わりには木の芽峠拝登が行われます。木の芽峠とは福井と敦賀を結ぶ古道にある峠です。平安時代から明治の初めまで一〇〇〇年近くの間、重要な幹線道として多くの人が行き来していました。

永平寺にて体調を崩しておられた高祖（道元禅師）さまは、波多野義重公のすすめもあり、京都にて療養をすることになりました。その道中、脇本の宿で一泊し、いよいよ木の芽峠を超える時、傍に控えていた永平寺の三世である徹通義介禅師さまを呼びました。そして、義介禅師さまはここで引き返し、永平寺を護るように伝えたのです。これが高祖さまと義介禅師さまの今生の別れとなったのです。この故事にならない、毎年この祖蹟を拝登するのです。

修行僧は皆、服装を調べ、作法に則って丁寧にご供養の法要を行います。

高祖さまを偲び、義介禅師の思いを追想しながら心より読経します。

参加する修行僧の多くが上山して間もない者たちです。実はこの木の芽峠は、永平寺に上山してから初めて境内の外に出る行事でもあります。また、永平寺以外の高祖さまに由縁のある史蹟へ行くのもこれが初めてです。

久しぶりに外出をした時、とても不思議な感覚になったのを筆者は覚えていません。道行く車や人々、街並みが自分とは少し距離があるように感じるので。慌ただしく動く社会の中で自分たちの一団だけがただ静かに祖蹟を目指し黙々と峠道を歩く、そのような感覚になるのです。木の芽峠に着き、高祖さまの碑に礼拝した時の感動と湧き上がってきた追慕の念は今でも忘れられません。

修行生活の中でも特に強く記憶に残る行事の一つです。



ご本山だより

大本山總持寺

【制中五則と慶讃法要】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



薫風や畳替へたる大祖堂

薫風とは初夏に新緑の間を吹き抜けてくる風のことです。

南方から来るこの風は若葉の薫りをまもっています。故に風香るは間違いで風薫るが正しいのです。

四月一日から三週間に亘って勤まった總持寺開祖・瑩山禪師七百回大遠忌も無事成就致し、日常の僧堂生活が戻ってきたのも束の間で、すでに四月より夏安居制中という一〇〇日間の修行期間に入っている中、五月十三日から十七日にかけて「制中五則」という大切な行持が行われます。

その五日目には「首座法戦式」のクライマックスを迎えます。大勢の修行僧の先頭に立って指導するリーダーを「首座」と呼びます。

当日は石附禪師の命を受けて、首座

が大勢の修行僧と禅問答を交わします。

この法戦式では首座は修行で培った全力量を発揮し、緊張感の漲る場面が展開されます。

この五則が終了するとようやく一〇〇日間の修行期間の半分が終わり、また更に首座を中心として修行僧が皆同じ方向を向き、協力し合うことで乳水のように行きます。

更に今年が開祖・瑩山禪師七百回大遠忌をお讃える意味で五月二十七日より六月二日まで慶讃法要が勤まることになっています。

禅師さまより命を受けた方々が導師をお勤めになられ瑩山禪師の御徳を讃えられます。

このように今年、總持寺はこの法要で禅道場としていよいよ活気づいてくるのではないのでしょうか。

選・坊城俊樹

羽生結弦ふと現れさうな氷面鏡

宮城県 金升 富美子

評

まことに面白い題材を選ばれた。かなり寒い湖か何かの結氷の様子だろう。鏡のようなツルツルの氷面鏡を見ているとそれがスケートリンクのように感じた。同時にそこに現れそうなのが幻の羽生結弦選手。三回転トールプでも決めて去って行ったか。

靴の上に靴載つてみる雛の客

鳥取県 眞山 博充

評

お雛さまの節句の風景。女の子の節句だがどうやら腕白な男の子も混じっていたのだろう。玄関にはそれらの子どもの革靴や運動靴が散乱して重なり合っている。少なくとも十人くらいは居るのではなからうか。その後は雛祭りのお菓子の争奪戦だったりして。

◆ 雪の夜や子等に昔の物語り

鳥取県 徳本 義則

◆ 手作りの指ぬき緩ふ針供養

東京都 榎本 由美子

◆ 蝶の来てやはらかなる山河かな

大阪府 柏原 才子

◆ 春を行くこの世あの世の真中を

島根県 金山 陽

◆ 菜の花や夢の中まで咲きつづき

静岡県 堤 千春

◆ 寒の雨ふと等伯の松林図

千葉県 長澤 きよみ

◆ 六地藏母恋ふ声か虎落笛もがりぶえ

秋田県 高橋 カツ子

◆ 降る雪の一人にバスの停まりけり

愛媛県 井上 征郎

◆ 去年今年人道街道地獄道

山口県 栗屋 邦夫

◆ 筆始め薬缶の音響さけり

埼玉県 伊藤 博

選者吟

すれ違ふなり高飛車な香水と

俊樹

作句小見

男性にとつては女性の香水は憧れであったり恋の予感であったりする。しかし時には高飛車な香りを振りまいている香水とすれ違う。掲句はたしか銀座界限の道ですれ違った香水の香り。おそらくは美人だったろうがあの高飛車な香りはどうも頂けない。

選・長澤 ちづ

打つ波をかわ躲してついば啄むかもめ鷗なり日がな一日海
は荒れをり

鳥取県 眞山 博充

評 冬の日本海の荒れた海上を飛ぶカモメが波や風に抗いながら餌である魚を獲ようと必死な様子を詠う。のどかな情景に使われることの多い「日がな一日」がカモメに取っては永遠の命の連鎖に思える。

まだ温き窯出し炭を小切りした柔らかな手
応へ未だ忘れず

三重県 西村 廣視

評 炭焼き窯から出したばかりの出来立ての炭の様子が、リアルな感覚で表現されている。作者にとっても遠い日のことながら、未だに手の平に残る忘れられない感覚なのだ。

◆ 暖房のスイッチ入れるか迷うこの冬被災地想い

山口県 橋本 美知子

◆ からしばれの夜空に光る星ひとつ見つけて孤り誕生日祝ふ

岩手県 阿部 潔子

◆ 生きたまま亀も蛙も売られをり熱気のこもる台北の市

広島県 徳永 進一郎

◆ 吾のみのあの夏があり語らぬがリボン古びし麦藁帽子

岐阜県 後藤 進

◆ セスナ機の撒くビラをよく追いかけた見知らぬ土地の隣町まで

埼玉県 小林 茂之

◆ 試されてみるやも知れぬ一枚の葉書に拘り短日が暮る

兵庫県 前田 あつ子

◆ 終活に文管整理す捨てがたき亡き人々の水茎の跡

埼玉県 丸山 劫外

◆ 坐禅するわれに寄り添う幼子の真似とは言えど無言の半刻

ロンドン バロ― 典子

◆ 明けてゆく冬波荒く日本海磯の灯台にしぶきのあがる

鳥取県 徳本 義則

◆ 対岸の猫のお寺のお焚き上げ崖の上高く煙上り来

群馬県 松本 さえ子

選者誌

庭木なりし山椒の木の播り粉木の守り神ともはや

半世紀

ちづ

作歌小見

能登半島地震で被災された人々に心を寄せる橋本さん、多くの人の思いを代弁しています。小野茂樹の「あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ」を想い出す後藤さんの歌だが、作者らしい独自性をも保っています。